

第27回

我、包帯し、神、癒したもう

牧師 寺田信一

ルネサンスを迎えた16世紀、フランスは神聖ローマ帝国を相手に、イタリアの覇権をめぐる争ってました。戦地ではたくさんの負傷兵が出ましたが、現代とは違い、その頃の外科治療は迷信の影響が極めて強かったようです。例えば、銃で撃たれた傷が化膿するのは、傷が火薬の毒に汚染されているため、と考えられていました。そのために、「火薬の毒を消し去るため」と称して、煮えたぎった油で傷口を消毒したり、熱くなった焼きごてで焼いたりする処置が行われていたのです。しかしその結果、ケガ人は治るどころか、大火傷を負い、誰もが重篤な状態に陥っていました。

その頃、フランス軍の従軍医師にアンブロワズ・パレという人がいました。このパレが治療に使っていたのも初めはやはり煮え油でした。けれどもそのために兵士は治らず、患者用のベッドがすぐに埋まる事態となっていたのです。そんなある日、アクシデントが起こります。余りに多くの兵士が運び込まれて来たために、治療(?)に使うための油が無くなりそうになりました。それでも次々と負傷兵が運び込まれて来るので、パレはやむを得ず、自分で考案した新しい方法を試します。それは、卵の黄身と油とを交ぜて軟膏を作ることでした。そして、負傷兵の傷口に、煮え油の代わりにこれを塗り、せめてそこを覆ってあげようと考え、包帯で包んだのです。このようにしたほうが兵士たちの苦痛が和らぐと思ったからでした。

しかし、パレの心は不安に満ちていました、「私は正しいことをしたのでしょうか。明日になれば、火薬の毒のせいで、ケガ人たちはみんな死んでしまっているのではないのでしょうか。そうなれば私はもはや医者ではなく、戦場における人殺しに過ぎません。ああ、神よ、患者たちをお救いください」。パレはまんじりともせず、その夜を祈りながら過ごしたそうです。

ところが翌朝、パレはにわかには信じられない光

景を目の当たりにします。それは、ケガ人たちが皆、今までの治療では考えられないほどに回復している姿でした。中にはベッドの上でくつろいで談笑している者さえありました。そこでパレは、今まで教えられて



来た知識が、まったく根拠のない迷信、誤りであったことに気付いたのです。そしてもう二度と、残酷な煮え油を使うことはありませんでした。

これは「外科学のルネッサンス」と呼ばれる出来事で、医学の歴史に刻まれている人類への貢献でした。このことからパレはたいへん高い地位を得、フランス国王の侍医長にさえなります。けれども、おごることは無く、民衆の治療にも専念する優しい外科医であり続けました。例えば、国王に「哀れな患者よりもっと良い手当をしてくれ」と言われても、パレは「それはできません。すべての病人に国王と同じ手当をしているからです」と答えたそうです。

このパレが残した名言に「我、包帯し、神、癒したもう」という言葉があります。治療を終えたパレ先生が「随分と良くなりましたね」と言うと、どの患者も答えたそうです、「先生のおかげです」と。するとパレは「いいえ。私は包帯をただけです。あなたを治したのは神さまです」、そう言ったと伝えられています。

名医と呼ばれるひとは「自分は処置をただけ」と思っているものです。のみならず、パレはその上、患者に対して「あなたを本当に癒してくださったのは神さまです」と教えてあげられる医者でした。改革派の新教徒(ユグノー)であったパレの“ただ神にのみ栄光あれ”とする信仰が、その何気ない日常会話にも表れていた、ということなのでしょう。



一・三・五(土・休)

教会フェスタ2016

九月一八日(日)午前一〇時半
説教 田邊由紀夫茨木教会牧師

特別説教礼拝

八月一四日(日)午前一〇時半
説教 主なる神の救い
佐野純横須賀学院小学校宗教主任

特別説教礼拝

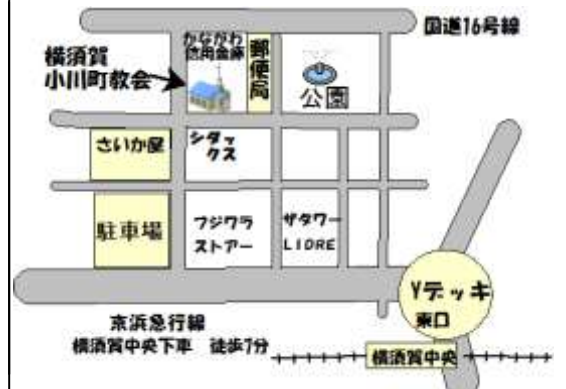
毎週日曜日、午前一〇時三〇分
説教 寺田信一牧師

主日礼拝

毎週日曜日午前九時、子どもの礼拝
があります。礼拝後、幼小科・中高科・成人科に分かれて分級が行われます。

教会学校礼拝

ごあんない



教会にはエレベーターが設置されています。また、身障者用トイレも整備されています。視覚障害の方には、点字聖書が用意されています。